

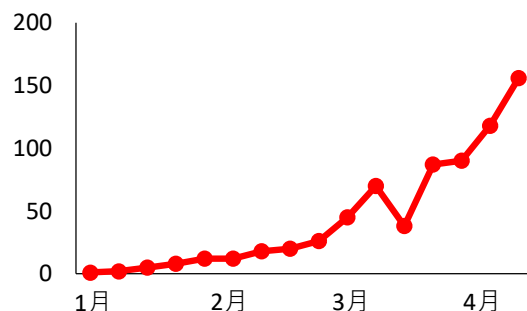
百日咳（ひやくにちせき）から 赤ちゃんを守るためにご家族ができること



2025年に入り、百日咳が国内で流行しています

- 百日咳は、百日咳菌という細菌による感染症です。
- 2025年に入ってから、新潟県内を含む日本国内で百日咳が大流行しています。

新潟県内の百日咳患者数（2025年）



百日咳は赤ちゃんでは重い病気となる ことがあります

- **新生児や乳児が百日咳にかかると重くなり**、呼吸が止まる発作、肺炎、脳症などの合併症が起ることがあります。この様な場合、適切な治療を行っても命を救うことができないこともあります。

小学校高学年から中学生の百日咳患者数が特に多くなっています

- 国内の定期接種では百日咳に対するワクチン（3種混合・4種混合・5種混合ワクチン）は1歳時の追加接種（4回目）が最後の接種です。4回接種しても、小学校に入る頃にはその免疫が低下しています。
- そのため、今年の新潟県内の百日咳流行でも小学校高学年から中学生の患者数が特に多くなっています。その親世代にあたる40代の患者数も多くなっています。
- ご兄弟、ご両親が百日咳に感染した場合、抵抗力がない赤ちゃんにうつることがあります。

百日咳はワクチンで予防できます

- ご兄弟、ご両親が3種混合ワクチンを接種することでご本人はもちろん、ワクチン未接種の赤ちゃんを百日咳から守ることができます。
- 国内では、沈降精製百日咳ジフテリア破傷風混合ワクチン（トリビック®）が接種できます。
- 日本小児科学会は、小学校に入る前の1年間および11-12歳での接種を推奨しています。
- 副反応として、接種部位の痛みや腫れ、赤みなどが起こることがあります。

① 小学校に入る前の1年間

② 11-12歳

での3種混合ワクチンの追加接種をお勧めします。
ご両親の3種混合ワクチンの追加接種もお勧めします。

ワクチン接種は**接種した人と重くなる可能性のある赤ちゃんを百日咳から守る積極的な予防手段**です。ご家族でよく話し合い、ご本人・ご両親が納得した上で接種することをお勧めします。接種を迷われている方はかかりつけの医師にご相談ください。